

# 瓜の涙

泉鏡花

青空文庫



年紀は少いののに、よつぽど好きだと見えて、さもおいしそうに煙草を喫みつつ、……しかし烈しい暑さに弱つて、身も疲れた様子で、炎天の並木の下に憩んでいる学生がある。

まだ二十歳そこらであろう、久留米絣の、紺の濃く綺麗な処は初々しい。けれども、着がえのなさか、幾度も水を潜つたらしく、肘、背筋、折りがみのあたりは、さらぬだに、あまり健く、康そうにはないのが、薄痩せて見えるまで、その処々色が褪せて禿げている。——茶の唐縮緬の帯、それよりも煙草に相応わな

いのは、東京のなにがし工業学校の金色の徽章きしょうのついた制帽で、  
 巻まきた 蓑たばこならまだしも、喫のんでいるのが刻煙草きざみである。

場所は、言つた通り、城下から海岸の港へ通る二里余りの並木の途中、ちようど真中まんなかどころ処ところに、昔から伝説を持つた大な一面の石がある——義経ぎけい記に、……

加賀国富樫とがしと言う所も近くなり、富樫の介すけと申すは当国の大  
 名ななり、鎌倉殿どより仰おほせは蒙こうむらねども、内々用心して判官殿ほんぐあんの  
 を待まち 奉たてまつるとぞ聞えける。武蔵坊むさしぼう申しけるは、君はこれ  
 より宮の越こしへ渡らせおわしませ——

とある……金かない 石いわの港で、すなわち、旧もとの名宮みやの越こしである。

真偽のほどは知らないが、おなじ城下を東へ寄つた隣国へ越こえる

山の尾根の談義所村というのに、富樫があとを追って、つくり山伏の一行に杯を勧めた時、武蔵坊が鳴るは滝の水、日は照れども絶えずと、謡うたつたと伝うるなる（鳴は滝）小さな滝の名所があるのに対して、これを義経よしつねの人待石ひとまちいしと称となうるのである。行歩こうほこや健かに先立つて来たのが、あるき悩んだ久我くがどのの姫君——北きたの方を、乳母めのとの十郎権ごんの頭かみが扶たすけ参らせ、後おくれて来るのを、判官がこの石に憩やすって待合させたというのである。目覚しい石である。夏草の茂った中に、高さはただ草を抽ぬいて二三尺ばかりだけれども、広さおよそ畳を数えて十五畳はあろう、深い割目われめが地ちの下したに徹とおつて、もう一つ八畳ばかりなのと二枚ある。以前はこれが一面の目を驚かすものだったが、何の年かの大地震に、坤こん軸じくを覆おして、左右

へ裂けたのだそうである。

またこの石を、城下のものは一口に呼んで巨石おおいしとも言う。

石の左右に、この松並木の中にも、形の丈の最も勝れた松が二株あつて、海に寄つたのは亭てい々として雲を凌ぎ、町へ寄つたは拮きつはん蟠して、枝を低く、彼処かしこに湧出づる清水に翳す。……

そこに、青き苔こけなめらの滑かなる、石いしがこい 罫ほりぬきの掘抜を噴出づる水は、

音に聞えて、氷のごとく冷やかに潔い。人の知つた名水で、並木の清水と言うのであるが、これは路傍みちばたに自から湧いて流るるの

でなく、人が罫ひさしつた持主があつて、清水茶屋と言う茶店が一軒、

田畝たんぼの土手上ひさしに廂を構えた、本家は別の、出茶屋でちやだけでも、ちよつと見霽みはらしの座敷もある。あの低い松の枝の地紙形じがみなりに翳蔽さしおほ

える葉の裏に、葦簀よしずを掛けて、掘抜めぐに繞めぐらした中を、美しい清水は、松影に揺れ動いて、日盛ひぎかりにも白銀しろがねの月影をこぼして溢あふるのを、広い水槽でうけて、その中に、真桑瓜まくわうり、西瓜すいか、桃すもも、李ももの実を冷ひやして売る。……

名代なだいである。

## 二

畠はたけ一帯、真桑瓜が名産で、この水あるがためか、巨石おおいしの瓜は銀色だと言う……瓜畠あおたがずツと続いて、やがて蓮池はすいけになる……それからは皆青田で。

畑はたのは知らない。実際、水槽に浸したのは、真ま蒼つさおな西瓜も、黄なる瓜も、颯さつと銀色の蓑みのを浴びる。あくどい李あかの紅あかいのさえ、淡くくるくると浅葱あさぎに舞う。水ほとばしきおいに迸る勢いに、水槽を装もり上あがって、そこから百条すだれの簾すだれを乱して、溝を走って、路みちばた傍ばたの草を、さらさらと鳴して行く。

音が通しずくい、雫しずくを帯びて、人待石——巨石の割目に茂った、露草の花、蓼たでの紅たでも、ここに腰掛けたという判官のその山伏の姿よりは、爽さわかに鎧よろうたる、色おどしげよき緋おどしげ毛けを思おぼわせて、黄こがね金の太刀こがねも草く摺さすりも鳴るよ、とばかり、松こずえの梢こずえは颯さつ々と、清水こずえの音さつに通さつって涼さすしい。

けれども、涼しいのは松の下、分けて清水の、玉を鳴して流る

る処ばかりであろう。

三間幅げん——並木の道は、真白まっしろにキラキラと太陽に光つて、ごろた石は炎を噴く……両側の松は梢から、枝から、おのが影をおのが幹にのみ這はわせつつ、真黒まっくろな蛇の形を畝うねらす。

雲白く、秀でたる白根しらねが岳の頂に、四時の雪はありながら、田は乾き、畠は割れつつ、瓜の畠の葉も赤い。来た処も、行く道も、露草は胡麻ごまのように乾ひび、蓼の紅は蚯蚓みみずが爛ただれたかと疑われる。人の往来ゆききはバツタリない。

大空には、あたかもこの海の沖を通つて、有磯海ありそうみから親不おやしら知ずの浜を、五智ごちの如来にょらいへ詣もつずるといふ、泳ぐのに半身を波の上に躪あらわして、列を造つて行くとか聞く、海豚いるかの群が、毒氣を吐掛

けたような入道雲の低いのが、むくむくと推おし並んで、動くともなしに、見ていると、地じが揺れるように、ぬツと動く。

見すばらしい、が、色の白い学生は、高い方の松の根に一人居た。

見ても、薄桃色に、また青く透すきと明る、冷い、甘い露の垂りそうな瓜に対して、もの欲ほしげに思われるのを恥じたのであろう。茶店にやや遠い人待石に――

で、その石には腰も掛うけず、草うに蹲ずくまつて、そして妙な事をする。……煙草たばこを喫のむのに、燐寸マッチを摺すりつた。が、燃さしの軸を、消えるのを待つて、もとの箱に入れて、袂たもとに蔵しまつた。

乏しい様子が、燐寸ばかりも、等閑なおよになし得ない道理は解よめ

るが、焚もえ残りの軸を何にしよう……

蓋けだし、この年配としごろの人数ひとかずには漏れない、判官ほうがん鼻び肩いが、そ

の古跡を、取散らすまい、犯すまいとしたのであつた——

「この松の事だろうか……」

——金かない石いわの湊みなと、宮の腰の浜へ上つて、北海の鮓たこと烏賊いかと蛤はまぐりが、

開帳まいりに、ここへ出て来たという、滑稽おかしな昔話がある——

人待石やすに憩やすんだ時、道中の慰みに、おのおの一芸つかまつを仕ろうと申

合す。と、鮓まつが真前まっさきにちよろちよろと松の木の天辺てっぺんへ這はつて、

脚をぶらりと、

「藤の花とはどうだの、下り藤さが、上り藤あが。」と縮んだり伸びたり。

烏賊が枝へ上つて、鱈ひれを張つた。

「印半纏しるしばんてん 見てくんねえ。……鳶職とびのもの、鳶職のもの。」

そこで、蛤が貝を開いて、

「善光寺様、お開帳。」とこう言うのである。

鈍豆煙管なたまめぎせるを嚙かむように啣くわえながら、枝を透かして仰ぐと、雲からの擲からんだ暗い梢は、ちらちらと、今も紫の藤が咲くか、と見える。

## 三

「——あすこに鮓かかが居ます——」

とこの高松の梢に掛かかった藤の花を指ゆびさして、連つれの職人が、いまのその話をした時は……

ちようど藤つつじの盛な頃を、父と一所に、大勢で、金石の海へ……船でいwashiamい網を曳かせに行く途中であつた……

楽しかつた……もうその茶店で、大人たちは一度吸筒すいづつを開いた。早や七年も前になる……梅雨晴の青い空を、流るる雲に乗るように、松並木の梢を縫つて、すうすうと尾長鳥が飛んでいる。長閑のどかに、静しずかな景色であつた。

と炎天に夢を見る様に、恍惚うっとりと松の梢に藤の紫を思つたのが、にわかとびに驚く！ その次なる烏賊の芸当。

鳶職とびというのを思うにつけ、学生とびのその迫つた眉はたちまち暗かつた。

松野謹三、渠かれは去年の秋、故郷ふるさとの家が焼けたにより、東京の

学校を中途にして帰つたまま、学資の出途しゅつとに窮こぶしするため、拳こぶしを握り、足を爪立てているのである。

いや、ただ学資ばかりではない。……その日その日の米薪まきさえおぼつか  
覚束おぼつかない生活の悪処あせに臨んで、——実はこの日も、朝飯あさを済あましたばかりなのであつた。

全まる焼やけのあとで、父は煩わづつて世を去つた。——残つたのは七十に近い祖母と、十ウばかりの弟ばかり。

父は塗師ぬし職しやくであつた。

黄金きん無垢むくの金具、高時たかまきえ絵えの、貴重な仏壇の修復をするのに、

家に預つてあつたのが火になつた。その償いの一端にさえ、あらゆる身しん上しょうを煙けむにして、なお足りないくらいで、焼あとには灰

らしい灰も残らなかつた。

貧乏寺の一間を借りて、墓の影法師のように日を送る。――

十日ばかり前である。

渠かれが寝られぬ短夜みじかよに……疲れて、寝忘れて遅く起きると、祖と

母しより

の影が見えぬ……

枕まくらもと頭の障子の陰に、朝の膳ぜんごしらえが、ちゃんと出来てい

たのを見て、水を浴びたように肝きもまで寒くした。――大川も堀も

近い。……ついぞ愚痴ぐちなどを言つた事のない祖母としよりだけけれど、こ

のごろの余りの事に、自分さえなかつたら、木登りをしてでも学問

の思いは届こうと、それを繰返していたのであるから。

幸さいわいに箸箱はしぼこ

の下に紙切が見着かつた――それに、仮名かなでほつほ

つと（あんじまいぞ。）と書いてあつた。

祖母としよりは、その日もおなじほどの炎天を、草鞋わらじばき穿で、松任まつとう

という、三里隔つた町まで、父が存生ぞんしょうの時に工賃の貸がある  
こつとうや  
骨董屋へ、勘定を取りに行つたのであつた。

七十としよりの老が、往復六里。……骨董屋は疾とつに夜遁よにげをしたとやら

で、何の効かいもなく、日暮方ひぐれがたに帰つたが、町端まちはずれまで戻ると、

余りの暑あつさと疲労つかれとで、目が眩くらんで、呼吸いきが切れそうになつた時、

生玉子を一個ひとつ買つて飲むと、蘇生よみがえつた心地がした。……

「根氣こんの薬じゃ。」と、そんな活計くらしの中から、朝ごとに玉子を割

つて、黄味も二つわけにして兄弟へ……

萎しおれた草に露である。

——今朝も、その慈愛の露を吸った勢いきおいで、謹三がここへ来たのは、金石の港なにかしに何某とて、器具商があつて、それにも工賃の貸がある……懸かけを乞こひに出たのであつた——

若いものの癖として、出たところ勝負の元気に任せて、影も見な  
いで、日ひざかり盛を、松並木の焦げるがごとき中途ちゆうとに来た。

暑さに憩うだけだったら、清水にも瓜にも気兼きがねのある、茶店の  
近所でなくつても、求むれば、別なる松の下蔭もあつたらう。

渠かれはひもじい腹も、甘くなるまで、胸に秘めた思おもひがあつた。

判官の人待石。

それは、その思を籠こむる、宮殿の大なる玉の床と言つても可よ  
らう。

## 四

金石街道の松並木、ちようどこの人待石から、城下の空を振向くと、陽春三四月の頃は、天の一方をほつと染めて、あまのがわ銀河の

横たうごとき、ひとすじ一條の雲ならぬ紅の霞が懸る。……

遠山の桜にほうふつ髣髴たる色であるから、花の盛には相違ないが、

野山にも、公園にも、数の植わったやしきまち邸町にも、土地一統が、

桜の名所として知った場所に、その方角に当つては、ひとところ一所と

して空に映るまで花の多い処はない。……霞の滝、かくれ沼、浮

きしろ城、がたりもの語を聞くのと違って、現在、誰の目にもなが視めらるる。

見えつつ、幻影まぼろしかと思えば、雲のたたずまい、日の加減で、その色の濃い事は、一いつとき齊ひももに緋桃ひももが咲いたほどであるから、あるいは桃だろうとも言うのである。

紫の雲の、本願寺の屋の棟にかかるのは引いんじょう接じょうの果報ある善男善女でないわしうりさばうりと拝わまれぬ。が紅の霞はその時節いにここを通る鱒い売わしうり 鱒い 売わしうりも誰知らないものはない。

深秘な山には、谷を隔てて、見えつつ近づくべからざる巨木名花があるたえと聞く。……いづれ、佐保姫の妙なる袖の影であろう。

花の蜃気楼しんきろうだ、海市かいしである……雲井桜と、その霞たを称たえて、人待石に、氈せんを敷き、割籠わりごを開いて、町から、特に見物が出るくらい。

けれども人々は、ただ雲を掴んで影を視めるばかりなのを……  
 謹三は一人その花吹く天——雲井桜を知っていた。

夢ではない。……得忘るまじく可懐しい。ただ思うにさえ、胸  
 の時めく里である。

この年の春の末であつた。——

雀を見ても、燕を見ても、手を束ねて、寺に籠つてはいられない。  
 その日の糧の不安さに、はじめはただ町や辻をうろついて廻  
 ったが、落穂のないのは知れているのに、登音にも、けたたま  
 しく驚かさるるのは、草の鶉よりもなお果敢ない。

詮方なさに信心をはじめた。世に人にたすけのない時、源氏  
 も平家も、取継るのは神仏である。

世間は、春風に大きく暖く吹かるる中を、一人陰になつて霜げながら、貧しい場末の町端から、山裾の浅い谿に、小流の畝々と、次第高に、何ヶ寺も皆日蓮宗の寺が続いて、天満宮、清正公、弁財天、鬼子母神、七面大明神、妙見宮、寺々に祭つた神仏を、日課のごとく巡礼した。

「……御飯が食べられますように、……」

父が存生の頃は、毎年、正月の元日には雪の中を草鞋穿でそこに詣ずるのに供をした。参詣が果てると雑煮を祝つて、すぐにお正月が来るのであつたが、これはいつまでも大晦日で、餅どころか、袂に、煎餅も、榧の実もない。

ある一寺に北辰妙見宮のまします堂は、森々とした樹立の中を、

深く石段を上る高い処にある。

「ぼろきてほうこう。ぼろきてほうこう。」

昼も梟ふくろうが鳴交わした。

この寺の墓所はかしよに、京の友禅とか、江戸の俳優某なにがしとか、墓があ

るよし、人伝ひとづてに聞いたので、それを捜すともなしに、卵塔らんとうの

中へ入った。

墓は皆暗かった、土地は高いのに、じめじめと、落葉も払わず、  
苔こけうきぐさは萍ひらのようであった。

ふと、生垣のぞを覗いた明あかるい綺麗な色がある。外の春日はるびが、麗うららかに

垣やれめの破目やれめへ映まって、娘むすめが覗くように、千代紙ちよぢで招くのは、菜の花ななに交まじる紫雲英げんげである。……

少年の臉は颯と血を潮した。

袖さえ軽い羽かと思う、蝶に憑かれたようになつて、垣の破目をするりと抜けると、出た処の狭い路は、飛々の草鞋のあと、まばらの馬の沓の形を、そのまま印して、乱れた亀甲形に白く乾いた。それにも、人の往来の疎なのが知れて、隈なき日当りが寂寥して、薄甘く暖い。

怪しき臭気、得ならぬものを蔽うた、藁も蓆も、早や路傍に露骨ながら、そこには藁の濃いのが咲いて、淡いのが草まじりに、はらはらと数に乱れる。

馬の沓形の畠やや中窪なのが一面、青麦に菜を添え、紫雲英を畔に敷いている。……真向うは、この辺一帶に赤土山の元げ

た中に、ひとり薄萌黄うすもえぎに包まれた、土佐絵に似た峰である。

と、この一廓ひとつくるわの、徽章きしょうとも言つべく、峰の簪かざしにも似て、

あたかも紅玉ちりばを鏤ちりばめて陽炎かげろうの箔はくを置いた状さまに真紅まゝに咲静さきまった

のは、一株の桃であつた。

綺麗すごさも凄すごかつた。すらすらと呼吸いきをする、その陽炎かげろうにもものを

言つて、笑つてゐるようである。

真赤まっかな蛇まが居まようも知れぬ。

が、渠かれの身みに取つては、食たに尽つきて倒たるるより、自然ひとりに死ぬ

なら、蛇まに巻まかれたのが本望ほんぼうであつたかも知れぬ。

袂たもとに近い菜なの花はなに、白しろい蝶ちょうが来て誘さそう。

ああ、いや、白しろい蛇まであろう。

その桃に向つて、行きざまに、ふと見ると、墓地はかちの上に、妙見宮の棟の見ゆる山へ続く森の裏は、山際から峩がけうえ上を彩つて——はじめて知つた——一面の桜である。……人は知るまい……一面の桜である。

行くゆに従うて、路は、奥拡がりにぐるりと山の根を伝う。その袂たもとにも桜が充みちた。

しばらく、青麦の畠になつて、紫雲英で輪取る。畔はたづたいに廻りながら、やがて端へ出て、横向に桃を見ると、その樹のあたりから路が坂に低くなる、両方は、飛々さしのぞ差覗く、小屋、藁屋を、屋根から埋うずむばかり底広がりうすに奥を蔽おほうて、見尽されない桜であつた。

余りの思いがけなさに、渠は寂然たる春昼をただ一人、花に吸われて消えそうに立った。

その日は、何事もなかった——もとの墓地を抜けて帰った——ものに憑かれたようになって、夜はおなじ景色を夢に視た。夢には、桜は、しかし桃の梢に、妙見宮の棟下りに晁々と明星が輝いたのである。

翌日も、翌日も……行つてその三度の時、寺の垣を、例の人里へ出ると齊しく、桃の枝を黒髪に、花菜を棲にして立った、世にも美しい娘を見た。

十六七の、瓜実顔の色の白いのが、おさげとかいう、うしろへさげ髪にした濃い艶のある房りした、その黒髪の鬢が、わざと

ならずふつくりして、優しい眉の、目の涼しい、引しめた唇の、  
 やや寂しいのが品がよく、鼻筋が忘れたように隆い<sup>たか</sup>。

縞目<sup>しまめ</sup>は、よく分らぬ、矢<sup>や</sup>緋<sup>が</sup>ではあるまい、濃い藤色の腰に、  
 赤い帯を胸<sup>むな</sup>高<sup>な</sup>にした、とばかりで袖を覚えぬ、筒袖だったか、  
 振袖だったか、ものに隠れたのであろう。

真昼の緋桃<sup>ひもも</sup>も、その娘の姿に露の濡色を見せて、髪にも、髻<sup>もとどり</sup>に  
 も影さす中に、その瓜実顔を少<sup>すこ</sup>く傾けて、陽炎を透かして、峰の  
 松を仰いでいた。

謹三は、ハツと後<sup>あと</sup>退<sup>す</sup>りに退<sup>す</sup>った。——杉垣の破目<sup>われめ</sup>へ引込むの  
 に、かさかさと帯の鳴るのが浅間<sup>あさま</sup>しかつたのである。

氣咎<sup>きとが</sup>めに、二日ばかり、手繰り寄せらるる思いをしながら、あ

えて行くのを憚はばったが——また不思議ほつこくに北国にも日和が続いた——三日めの同じ頃、魂がふツと墓を抜けて出ると、向うの桃に影もない。……

勿体なくも、路みち々みち々みち 拜まじんだ仏神の御名みなを忘れようとした処へ——花の梢が、低くたなび靨なびく……藁屋はずれに黒髪が見え、すらりと肩が浮ういて、俯うつむ向むいて出たその娘が、桃ももに立たちぎままに、目を涼すずしく、と小こ辰もどりをしようとして、幹こがくれそに密そと覗のぞいて、此方こなたをば熟じつと視みる時、俯ふしめ目めになつた。

思おもわず、そのとき渠かれは蹲しゃがんだ、そして煙草たばこを喫のんだ形は、——ここに人待石の松蔭と同じである——

が、姿も見みないで、横よこを向むきながら、二服とは喫のみも得えないで、

あわただ

慌しげにまた立つと、精々落着いて其方に歩んだ。畠を、ややめぐり足に、近づいた時であつた。

娘が、柔順すなおに尋常に会釈して、

「誰方？……」

と優しい声を聞いて、はつとした途端に、真上なる山やまふところ 懐から、頭へ浴びせて、大きな声で、

「何か、用か。」と喚わめいた。

「失礼！」

と言う、頸首えりくびを、空から天狗てんぐに引摺ひつつかまるる心地がして、

「通とお道りみちではなかつたんですか、失礼しました、失礼でした。」

——それからは……寺までも行き得ない。

## 五

人は何とも言わば言え……

で渠かれに取つては、花のその一里ひとさとが、所謂いわゆる、雲井桜の仙境であつた。たとえば大空なる紅くれないの霞に乗つて、あまつさえその美しいぬしを視みたのであるから。

町を行ゆくにも、氣の怯ひけるまで、郷里にうらぶれた渠が身に、——誰も知るまい、——ただ一人、秘密の境を探り得たのは、潜ひそかに大なる誇りであつた。

が、ものの本の中に、同じような場面を読み、絵の面おもてに、そう

した色彩に対しても、自おのずから面おもての赤うなる年とし紀である。

祖母としよりの傍そばでも、小さな弟と一所でも、胸はばかに思うのも憚はばられる。

……寝て一人の時さえ、夜着の袖を被かぶらなければ、心うしろめたに描くのが  
後うしろめた暗かい。……

——それを、この機会に、並木の松蔭ひそかに取出でて、深秘なるあ  
が仏を、人待石ひとかけに、密ひそかに据えようとしたのである。

成りたけ、人勢ひとかけに遠ひとけざかつて、茶店ちあなに離れたのに不思議はある  
まい。

その癖はた、傍そばで視みると、渠みちが目に彩り、心こころに映うつした——あの藤とうた  
けた娘むすめの姿を、そのまま取出して、巨おお石いしの床とこに据すえた処ところは、松  
並木なみきへ店みせを開ひらいて、藤娘とうむすめの絵ゑを売うるか、普賢ふけん菩薩ぼさつの勸進こんじんをするよ

うな光景であつた。

渠は、空くうに恍惚うつとりと瞳を据えた。が、余りに憧あこがるる煩惱は、かえつて行おこないす澄すましたもののごとく、容かたちも心も涼しそうで、紺こんが紺こんがすりすりさえ松葉の散つた墨染こころもの法衣ころもに見える。

時に、吸つたのが悪いように、煙を手で払つて、吠かますの煙草入かますを懐ふところ中しまへ蔵しまうと、静しずかに身を起して立つたのは——更あらためて松の幹あらたにも凭よりかか懸かつて、縫すがつて、あせつて、煩もたえて、——ここから見ゆるという、花の雲井をいまはただ、蒼あおくも白くも、熟じつと城下の天あの一方に眺めようとしたのであつた。

さりとも、人は、と更あらためて、清水の茶屋を、松の葉越ごしに差さしうか窺がうと、赤ちやけた、ばさらな銀杏いちようがえし返かまちをぐたりと横かまちに、

から縁台へ落掛おちかかるように浴衣の肩を見せて、障子の陰に女が転がる。

納戸へ通かよいくち口らしい、浅間あさまな柱に、肌襦袢はだじゆばんばかりを着た、  
 ごましおあたま胡麻塩頭の亭主が、売溜うりだめの錢箱の蓋ふたをおさえざまに、仰向けに  
 凭もたれて、あんぐりと口を開けた。

瓜畑みとおを見透しの縁——そこが座敷——に足を投出して、腹這はらばい  
 になった男が一人、黄色な団扇うちわで、耳も頭もかくしながら、土地  
 の赤新聞というのを、鼻の下に敷いていたのが、と見る間に、二  
 ツ三ツ団扇ばかり動いたと思えば、くるりと仰向けになった胸が、  
 臍へそまで寛はだける。

清水はひとり、松の翠みどりに、水晶の鎧よろいを揺据ゆりすえる。

蝉時雨せみしぐれが、ただ一つになつて聞えて、清水の上に、ジーンと響く。

渠は心ゆくばかり城下を視めた。

遠近おちこちの樹立こたちも、森も、日盛ひざかりに煙のごとく、重る屋根かさなに山も

低い。町はずれを、蒼空あおぞらへ突出た、青い薬研やげんの底かとするのに、

きらきらと眩まばゆい水銀を湛えたのは湖の尖端せんたんである。

あのあたり、あの空……

と思うのに——雲はなくて、蓮田はすだ、水田みずた、畠を掛けて、むくむ

くと列を造る、あの雲の峰は、海から湧わいて地平線上を押廻す。

冷つめたい酢の香が芬ぶんと立つと、瓜すもも、李の躍る底から、心ところてん太が三

ツ四ツ、むくむくと泳ぎ出す。

清水は、人の知らぬ、こんな時、一層高く潔く、且つ湧き、且つ迸ほとばしるのである。

蒼蠅ぎんばえがブーンと来た。

そこへ……

## 六

いかに、あの体ていでは、蝶よりも蠅たかが集たかろう……さし捨すてのおいらん草ちりづかなど塵塚ちりづかへ運ぶ途中に似た、いろいろな湯具蹴けだ出し。年増まじりにあくどく化粧けわった少わかい女が六七人、汗まみれになつて、ついでそこへ、並木を来かかる。……

年増分が先へ立つたが、いずれも日蔭たよをたよ便るので、振よじれた洗濯もののように、その濡れるほどの汗に、裾すそも振ふりもよれよれになりながら、妙に一列に列を造ていった体は、率すいいるものがあつて、一からげに、縄尻でも取つていそいで、浅間しいまであわれに見える。故あるかな、背後に迫つて男が二人。一人の少わかい方は、洋傘を片手に、片手は、はたはたと扇子を使い使い来るが、扇子面に広告の描いてないのが可訝おかしいくらい、何のためか知らず、絞しぼりの扱し帯ごきせなの背に漢竹の節を詰めた、杖ステッキだか、鞭むちだか、朱ふさの総ふさのついた奴やつをすくりと刺している。

年としばい倍ばいなる元はげあたま頭あたまは、紐ひものついた大おおきな蝦蟇がまぐち口くちを突つ込んだ、布ほ袋ていばら腹ふどしに、禪ぜんのあからさまな前まへはだけで、土地で売うる雪を切きつた

水を、てぬぐい手拭こもりにくるんで南とうなす瓜かぶりに、あご頤を締めて、やつぱり  
おおじいしつぱらい大爺が殿で。

「あらッ、水がある……」

と一人の女が金切声を揚げると、

「水がある！」

と云うなりに、こめかみの処へずつこう頭痛膏を貼った顔を掉ふつて、  
 年増が真まつさき先に飛込むと、たちまち、崩れたように列が乱れて、  
 ばらばらと女おんなれん連が茶店へ駆寄る。

ちよつと立どまって、大爺と口を利いた少わかいのが、続いて入り  
 ぎまに、

「じゃあ、何だぜ、お前さん方——ここで一休みするかわりに、

湊みなとじやあ、どこにも寄らねえで、すぐに、汽船だよ、船だよ。」

銀鎖を引張つて、パチンと言わせて、

「出帆に、もう、そんなに間もねえからな。」

「おお、暑い、暑い。」

「ああ暑い。」

もう飛ついて、茶碗やら柄杓ひしゃくやら。諸もろ膚はだを脱いだのもあれ

ば、腋わきの下まで腕まくりするのがある。

年増のごときは、

「さあ、水みづ行ぎ水よう。」

と言うが早いか、瓜の皮を剥むくように、ずるりと縁台へ脱いで

赤ま裸つ々だか。

黄色な膚はだも、茶じみたのも、清水の色に皆白い。

学生は面おもてを背けた。が、年増に限らぬ……言合せたように皆頭痛膏を、こめかみへ。その時、ぽかんと起きた、茶店の女のどろんとした顔にも、斉ひとしく即効紙そつこうしがはつてある。

「食やるが可いい。よく冷えてら。堪たまらねえや。だが、あれだよ、皆みんな渡してある小遣こづかいで各々めいめいもち持だよ——西すい瓜かが好よかつたらこみで行きねえ、中は赤いぜ、うけ合だ。……えへッへッ。」

きやあらしきやあらし若い奴やつひぐらし、蝸かじの化けた声を出す。

「真桑、李を噛かじるなら、あとで塩湯を飲みなよ。——うんにや飲みなよ。大金のかかった身体からだだ。」

と大爺は大王のごとく、真正面かまちの框あげに上胡坐あぐらになつて、ぎろ

ぎろと膚をはだみまわす。

とその中を、すらりと抜けて、褌つまも包ましいが、ちらちらと小こ刻きざみに、土手へ出て、巨石おおいしの其方そなたの隅に、松の根に立った娘がある。……手にも掬むすばず、茶碗にも後おくれて、浸して吸ったかと思うばかり、白地の手拭の端を、苔つぼむようにちよつと啣くわえて悄しおれた。巢立の鶴の翼を傷いためて、雲井の空から落ちざまに、さながら、昼顔の花に縫すがつたようなのは、——島田髭しまだに結つて、二つばかり年は長たけたが、それだけになお女らしい影を籠こめ、色香を湛たたえ、情なさけを含んだ、……浴衣は、しかし帯さえその時のをそのまま、見み紛まがう方なき、雲井桜の娘である。

## 七

——お前たち。渡した小遣<sup>こづかい</sup>。赤い西瓜。皆の身体<sup>からだ</sup>。大金——

と渦のごとく繰返して、その娘のおなじように、おなじ空に、その時瞳をじつと据えたのを視<sup>み</sup>ると、渠<sup>かれ</sup>は、思わず身を震わした。  
面<sup>おもて</sup>を背けて、港<sup>かた</sup>の方を、暗くなつた目に一目仰いだ時である。

「火事だ、」謹三はほとんど無意識に叫んだ。

「火事だ、火事です。」

と見る、偉大なる煙<sup>えんとつ</sup>筒のごとき煙の柱が、群<sup>むらがりわ</sup>湧いた、入

道雲の頂へ、海ある空へ真<sup>まつくろ</sup>黒にすくと立つと、太陽<sup>ひ</sup>を横に並木の正面、根<sup>かっ</sup>を赫と赤く焼いた。

「火事——」と道の中へ衝と出た、人の飛ぶ足より疾く、黒くろけむ煙は幅を拡げ、屏風を立てて、千仞の断崖を切立てたように聳つた。

「火事だぞ。」

「あら、大変。」

「おおき  
大きいよ！」

火事だ火事だと、男も女も口々に——

「やあ、馬鹿々々。何だ、そんな体で、引込まねえか、こら、引込まんか。」

と雲の峰の下に、膚脱、裸体の膨れた胸、大な乳、肥った臀を、若い奴が、鞭を振って追廻す——爪立つ、走る、緋の、白の、

股、向脛を、芻上げ、薙伏せ、挫ぐばかりに狩立てる。

「きやツ。」

「わツ。」

と呼ぶ声、叫ぶ声、女どもの形は、黒い入道雲を泳ぐように立騒ぐ真上を、煙の柱は、じりじりと蔽い重る。……

畜生——修羅——何等の光景。

たちまち天に蔓つて、あの湖の薬研の銀も真黒になつたかと思うと、村人も、往来も、いつまたたく間か、どツと溜つた。

謹三の袖に、ああ、娘が、引添う。……

あわれ、渠の胸には、清水がそのまま、血になつて湧いて、涙を絞つて流落ちた。

ばらばらばら！

火の粉かを見ると、こはいかに、大粒な雨が、一粒ずつ、粗く、  
 疎まばらに、巨石おおいしの面おもてにかかつて、ぱつと鼓草たんぽぽの花の散るように濡  
 れたと思うと、松の梢こずえを虚空から、ひらひらと降って、胸を掠かすめ  
 て、ひらりと金色こんじきに飜ひらって落ちたのは鮒ふなである。

「火事じゃあねえ、竜巻だ。」

「やあ、竜巻だ。」

「あれ。」

と口の裡うち、呼吸いきを引くように、胸の浪立なみだった娘の手が、謹三の  
 袂たもとに縋すがつて、

「可こ恐わい……」

「……………」

「どうしましようねえ。」

と引いて縫る、柔い細い手を、謹三は思わず、しかと取った。  
——いかになるべき人たちぞ…

大正九（一九二〇）年十月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年1月29日作成

2009年4月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 瓜の涙

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>